

道頓堀

第十二年

第百三十一號



お買物

大軌百貨店 大版上六

大軌



風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御 歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

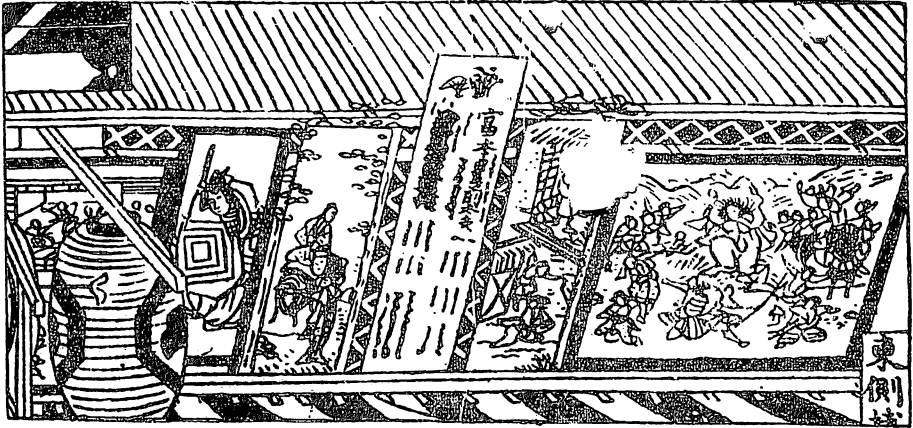
大阪支店

心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町

京都支店

木屋町ドングリ橋





★道 頓 堀 第十二年 第百卅一輯 目 次★

卷 頭 旨……………

グラフ……八月興行各座……………本 誌 特 寫

「大阪向き」に就いて……………長谷川 伸 (三)

新國劇二十週年に寄す……………中山楠雄 (四)

紅葉で逢つた頃……………額 田 六 福 (六)

新國劇不撓二十年……………俵 藤 丈 夫 (八)

芝居見たよ、

人 生 劇 場……………歌 舞 伎 座 (二)

總隱寺の仇撃…………… (七)



新涼芝居讀本

井上水谷のコンビ禮讚 菱田正男 (一六)

家庭劇小論 西尾福三郎 (一七)

關西新派の人々へ 森みよし (一九)

默阿彌「の鵜飼燎」 森ほのほ (二〇)

新喜劇隨筆 坂上勝芳 (二三)

思ひ出話 島田正吾 (二四)

「愛怨峽」の演出について 星四郎 (二五)

道頓堀豆新聞 (二六)

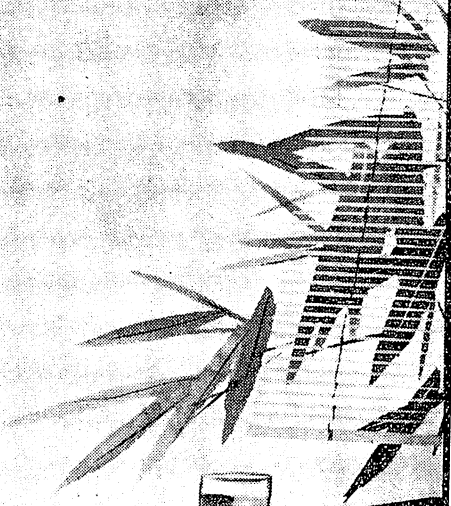
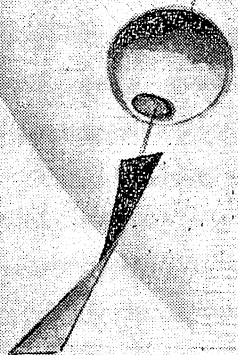
映畫街 (二七)

編輯後記 (二八)

冷用
銘酒

白雪

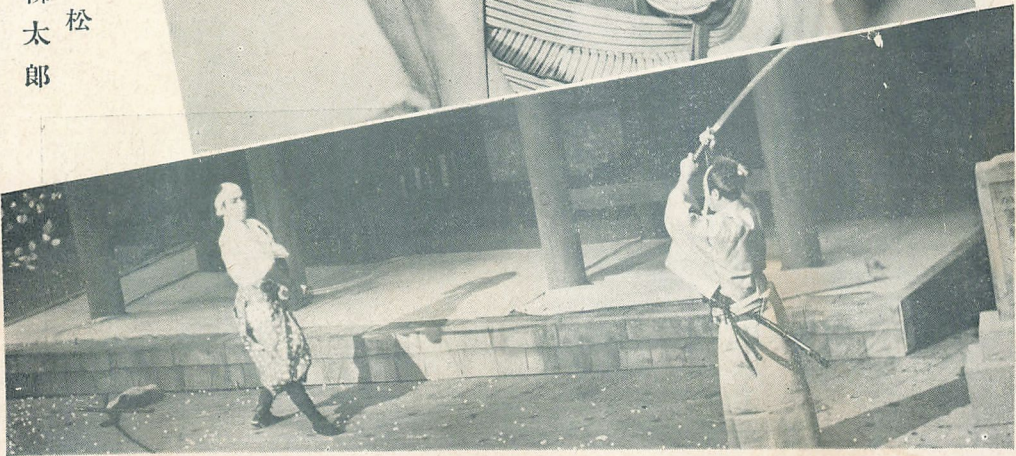
攝津・伊丹・灘
小西酒造株式會社



歌
舞
伎
座
新
國
劇



土
屋
丑
松
辰
己
柳
太
郎



【面臺舞の擊仇の寺隱總】

【場劇生人】



吾正田島…常良吉

郎太柳巳辰…角車飛



島長・よとお 葉二・でそお



【面臺舞場劇生人】

金語
冷房

冬の新國劇が果然！初日よ超満員の太極！！

新國劇 新時開幕

◇お好きな時間にお好きな芝居が自由に見られる一幕券は毎開幕前に發賣◇

第一 總 檯 寺の仇 擊 三 幕
長谷川 伸作 谷屋 充演出
凄槍！義烈！辰巳 島田が義剣をかざして 決死の果し
合のこそ新國劇ならでは描けぬ獨自の新史劇！

第二 次 郎 長 荒 神 山 二 幕
島田の仁吾を始め次郎長の精銳十七人が 阿濃徳一家と荒
神山に仁義の血闘！ 辰巳が次郎長で熱演
高崎士郎原作 (新新聞所載)
高田 保脚色 上原秀樹演出

第三 人 生 劇 場 三 幕 五 場
喜良常編
際たりこの榮冠！本年度文藝部賞受賞劇！生命を賭け
た「男の鐵律」と「女の眞實」 昭和の義理と人情を描く！
西條八十作詞 山田五十音作曲

第四 行 進 歌 不 撓 二 十 年 全 員 合 唱
茲に創立二十周年を迎へ 一百の同業不撓の精進！
この意義深き公演に臨んで まことに感慨無量………
◇今 興 發 演 田 右 二 郎 ◇

時 幕 二 十 一 枚 曜 日

前賣 一等席は 五日前より發賣・貳等より發賣
までは前日より發賣
いたします
前賣團體專用電話
(我) 二八二八六

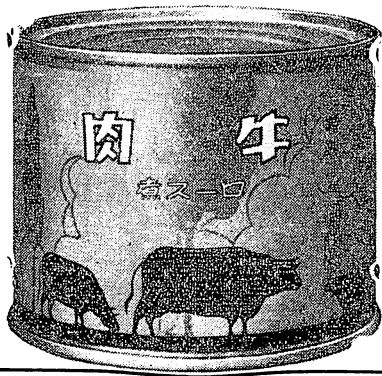
◇御觀劇料◇

櫻・四十錢
菊・七十錢
三等・九十錢
一等・一円三十錢
二等・二円五十錢

座 伎 舞 歌 阪

金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式會社 横山商店

暑 中 御 伺



本誌が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必らず胸臆を震撼させずには居ない感激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫。財界の波。商機の動きには正確の羅針盤、讀みたい新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られなぬ新聞。……………

新 部 一
開 貳 月 一
代 錢 十 五
錢 五 十 稅 郵

廣 告 欄 通 普
料 壹 行 一 欄 別 特
圓 貳 行 一 欄 別 特

發 行 所
大 阪 市 東 區 北 濱
四 丁 目 七 番 地
大 阪 日 新 報 社

電 話 北 濱
1101 • 1102 • 1103
1104 • 1800 • 2600
7 0 • 7 1
夜 間 受 付 發 送 用
1 1 0 1

暑 中 御 伺

◆不屈權勢、不媚富貴
◆議論公明、報道迅速

◆夕刊四頁發行



大阪市東區木野町三十一番地

發行所

大阪都新聞社

社長 南 隅 勇

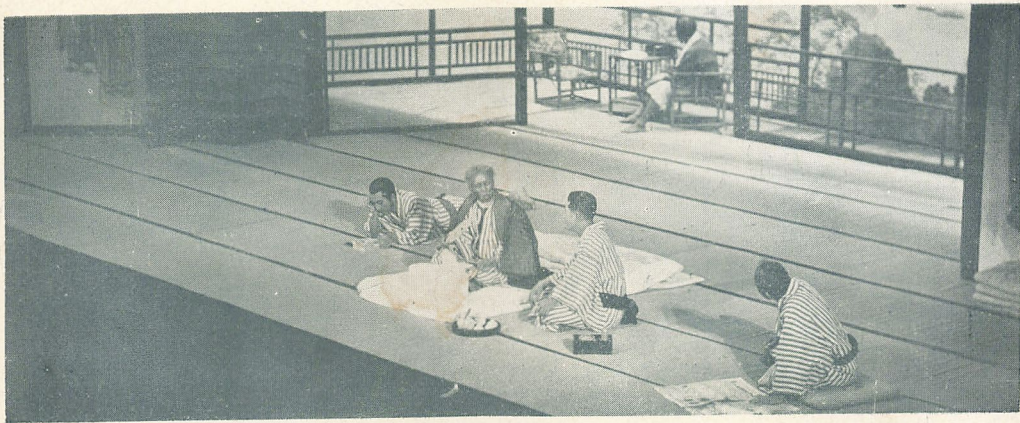
營業部 電話 南 (75)
編輯部 電話 天王寺 (77)

三三三
三六六
〇六六
一〇〇
番番番

【面臺舞山神荒】



【面臺舞場劇生人】



【面臺舞撃仇の寺隱總】





【山 神 荒】

田 島—吉 仁 の 良 吉 上
 島 長—く き お 房 女

己 辰—長 郎 次 の 水 清 中



唱 合 員 全 年 十 二 擽 不 下

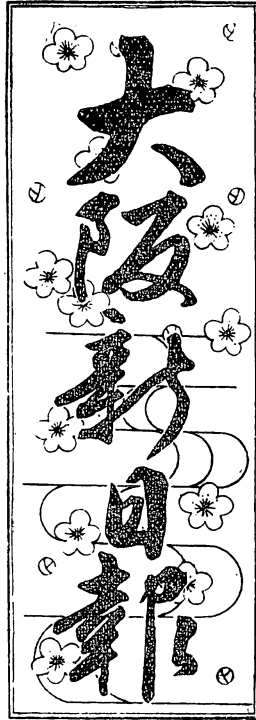


暑中御伺申上げます

松竹家庭劇

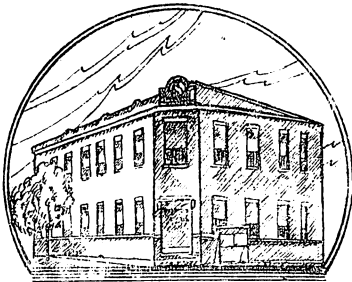
監照裝文 督明置部	脚本部	小元森高 織安田 桂英 一 二 郎豊郎亘	石浪御石二橋松千月小東 河花室島條 榮種丘松 千 郁 愛 鄉真照 澄花松孝 榮	會志會會會會會會會桑 我賀我我我我我我我 酒酒酒酒酒酒酒酒酒酒 家家家家家家家家家家田谷	十淡天鐵喜時文京十左通天 之 久 吾海照彌鶴彌童助福馬天外
山堀森村高大尾館茂林寺文 上部 瀬須和崎倉直文 貞秀次三文想倉直文 一雄郎郎七外三志福			燕子子代代子子子子子子		

暑 中 御 伺



大阪が生んだ異彩ある夕刊新聞として堅實な歩みを続ける皆さまの大阪新日報は更新の活氣を全紙面に漲らせて一流の特色を發揮しつゝ夕刊群を壓して噴々の好評を博しつゝある

◇大阪で一番面白い 特色のある新聞を……
ぜひ御愛讀下さい!!



發行所

大阪市此花區上福島南一丁目

大阪新日報社

電話福島④ 260番 261番 262番

(價定)

郵 一 一
ヶ
税 月 部
十五 二
五十
錢 錢 錢

暑
中
御
伺



社長 越智南海

電話 大阪市北區空町一丁目
七三〇番

支店 東 京・神 戶・奈 良

躍進！！

此の第一僚紙

毒朝二十頁 一月壹圓廿錢

夕九頁 一月六錢

海軍部の上業口本は先づ本紙を認む
海軍部知事の上にある者は先づ本紙を認む

大日本新聞

各新聞の購取地獄に於ては本紙を認む
購取地獄に於ては本紙を認む
購取地獄に於ては本紙を認む
購取地獄に於ては本紙を認む

大阪・北區堂島通四丁目三日番地
東京・麹町區有樂町二丁目四日番地

劇庭家竹松座中



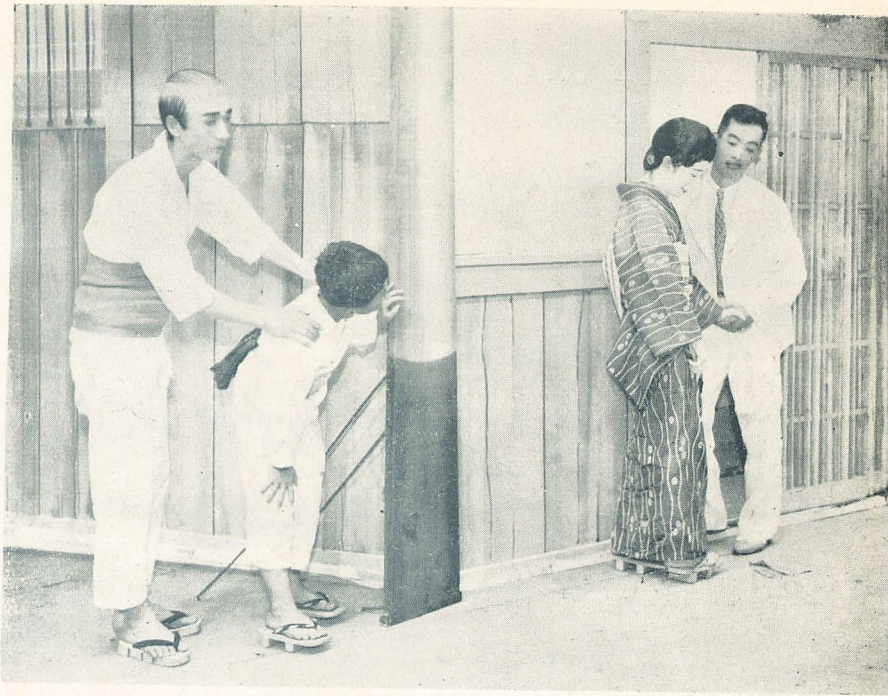
心赤の後銃る擧もに街げ告を急雲風の支北

……てしつうに臺舞を針人千

吾	十	……	人主館丸の日		
			藏三本坂		
外	天	……	師髮理	「針	人
			木三	千」	
河	石	……	金小妓藝		

「妻よ花嫁に返れ」

舞臺面



「流れ藻」舞臺面

關西新派劇

(道頓堀角座演出)

梅野井	中宮若澤樋六三富松瀧 士	都 笈泉三松田小 久保	小堀大市 藤井金林寺吉
田村葉	口條澤川葉	築川 井岡中田	波 澤川 山藤子 田田
秀	正 松蘭み政奈多滿笑蓮 や 美喜	文 武一瀧 聖久 太 一	若正健玉 寛力 清靖正 太 三
男	造 江子子子子子惠子子	男 夫作郎寛郎雄	朗夫司郎 美夫進郎夫雄

スセロプ
作製板看術美

るゆらあ
告廣傳宣

社事商告廣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戎電
ルクナミ

大阪 今日新聞

- ◇ 唯一の日本主義新聞
- ◇ 堂々の筆陣痛快無比の新聞
- ◇ 明るく朗らかな新聞
- ◇ キビくとも氣持好き新聞
- ◇ 特種満載興味横溢の新聞

大坂今日新聞社社長 笹川春一

大阪東区北一丁目二八番
電話北四〇二・四〇六〇五・三〇五〇一



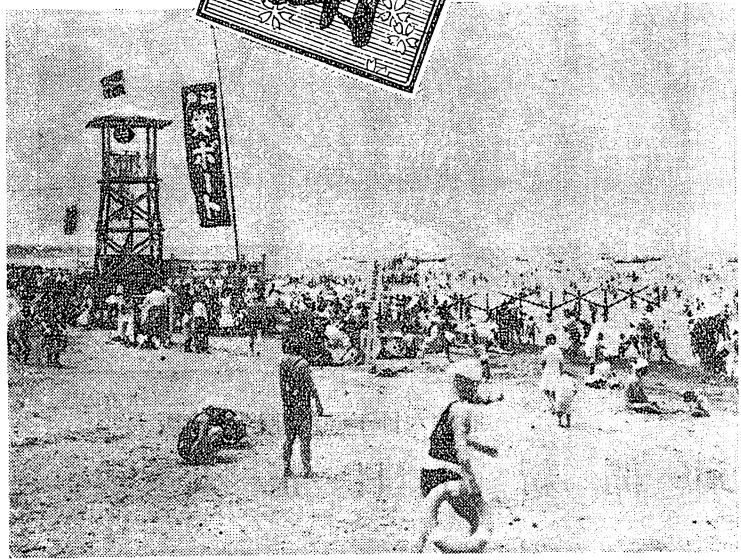
大阪一の愉快な
 明るい夕刊新聞
 年中無休
 関西中央新聞

購読料 一部 金貳錢
 一ヶ月 金五拾錢

本社主催の山へ海へ

夏の二大催し

↑ 生駒山上納涼大會
 ← 堺大濱海水浴場



光りは東方より
非常時新聞
躍動！

錦城 米田誠夫經營



「筆陣堂々天下無敵」
「正戰勇鬪易日本一」

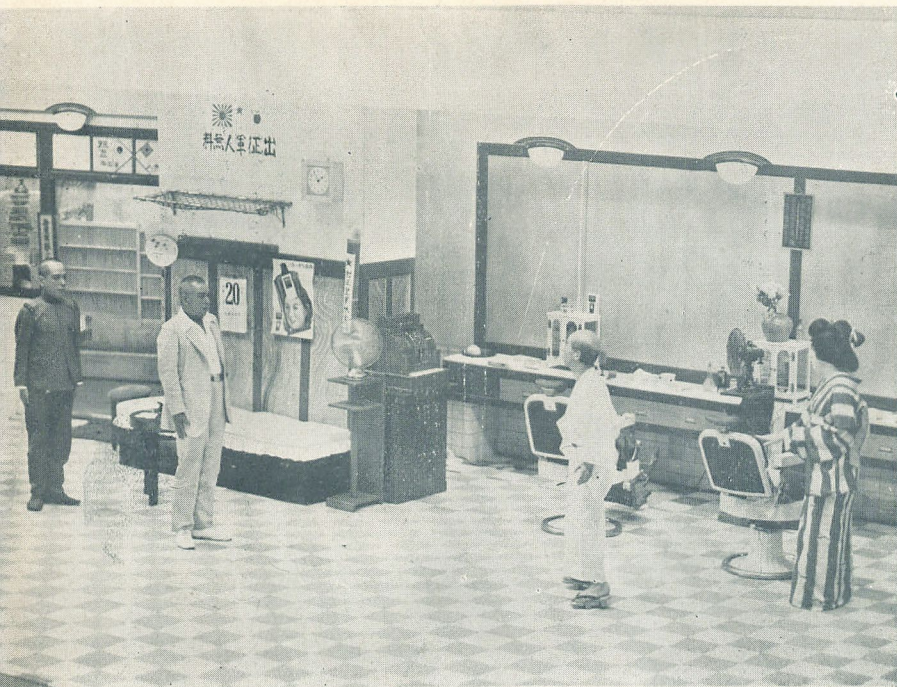
大阪市東區北濱四丁目六番地

大 正 日 日 新 聞 社

番九四四一 番〇七二〇
番八九一二 番六四四一
番〇二八二 番七四四一
番八〇三四 番八四四一

(23) 濱北話電

「千人針」舞臺面



「眞犯人は誰？」舞臺面



浪花座本吉シヨウ



永田キダグーの紺屋高尾

大 阪 市 中 島



(通 電 稱 略)

大阪電報通社

本 社 日 本 電 報 通 信 社
(東 京 銀 座)

北 電

一 一 一
九 九 九 九 九 五 五
八 七 六 四 三 二 一 六 五

(三三)

濱 話

電

電通は廣告部を初め印刷部、寫眞部、製版部、意匠部、廣告統計部、事業部、總務部等の機械的及事務的機構を特設完備し内外の新聞は勿論雜誌廣告の代理取扱を爲し御用命に對しては最も便利に、最も敏速に、最も確實に、最も有効に、誠意と責任を持ちまして御引受致して居ります従來の通信部が社團法人同盟通信社となり營業部が日本電報通信社となり共に姉妹會社として並營以て世界的舞台に飛躍して居りますとも御含み下さいまして精々御利用の切ならんことを御願ひ致します。

通

製 版
寫眞版、凸版、紙型
木版、鉛版、活字鑄造
印 刷
新聞、雜誌、商報
其他一般印刷
活動寫眞
文化、教育、宣傳、廣告
トーキ

暑
中
御
伺



中
外
商
業
新
報
社
經
營

大
阪
北
濱

御観劇には是非 ガイドの御利用

芝居の切符は「ブレイガイド」で御求め下さいますのが一番お徳で御座います。御場所もよろしいし一枚の切符でもすぐ御届け致します。殊に團體にて大勢様御観劇の場合は特に御安く御相談致します

ブレイガイド観劇會

新會員大募集

第壹 一、會費一ヶ月金一圓也

二、觀劇回数 年四回

一、劇場名

歌舞伎座又ハ京都南座、中座、浪花座又ハ角座

二、觀劇回数 年四回

一、會費一ヶ月金一圓也

第貳 一、劇場名

歌舞伎座、中座、浪花座又ハ角座、寶塚大劇場又ハピクニツク

●御注意

詳細は御一報次第規則書並に月報御送り致します。

番九〇三三
番五九九三
(二) 番一〇五四
(五) 番一七四五
(三) 番一四五五

電話
北濱

ブレイガイド

大阪北區中之島朝日ビル一階
株式会社 旅の平八社
朝日ビル營業所

大阪兼
スバ營

各種印刷

加藤印刷所

大阪市東成區鶴橋北之町一丁目
電話天王寺(77)二二四七番



關西唯一の經濟新聞！
我が國證券市場の權威！



朗かな晝休みの好伴侶！
我國最初の晝刊新聞！

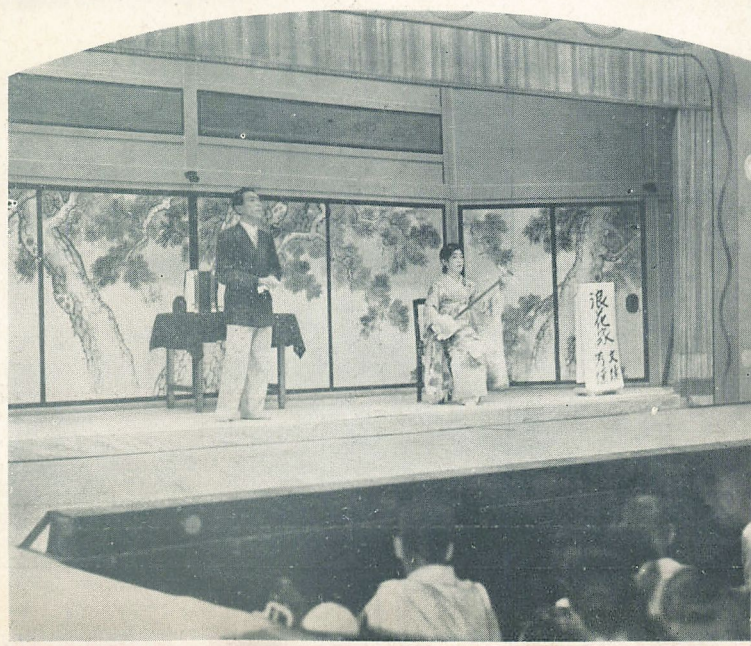
株式會社 大阪經濟新聞社

大阪・東區・北濱
電話代表北濱一〇〇番

「愛 怨 狭」

おふみ…梅野井
芳太郎…笈川

角座關西新派劇



お互に仲ようやらサして頂きマホ
と劇中別ならぬ劇中マンザイ…



集面場各「變事橋溝蘆」

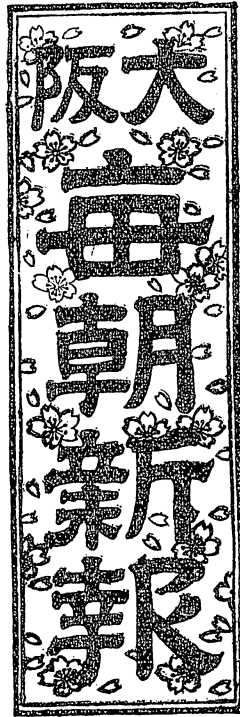


大時新架

躍進！
躍進！！

2507

暑
中
御
伺



株式會社

每朝新報社

大阪此市花區上福島一七二
代表 土佐堀五九一五番
土佐堀五九二番・三〇八九番
私書函 西野田 二二號
振替 口座 大阪 四二〇六番

迅
速
叮
嚙

銅
版
凸
版

吉谷寫真製版所

大阪市東成區大今里町七五九

電話南(75)六八一五番

第十二年

八月號

月刊・演劇・雑誌
演 劇 類 編

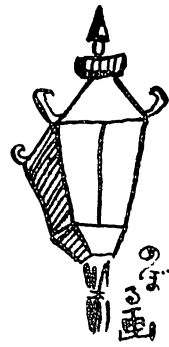
第 三 百 一 十 一 輯

卷 頭 言

菊池寛の小説が人生を戀愛を生活を訓えてゐることは廣く深い讀者層にもつてゐることによつて事實認められる。だが、それ以上に映畫や演劇は大衆に觸れ親しまれてゐる。

大衆は明朗で、健康な日本人のそれを求めてゐる。

だからもつともらしい理屈や理論にこだわらず、企業家は大衆が何を求めてゐるかを、突き當てるべきだ。大衆的なものこそ大衆から絶對的な支持を享ける——大衆的といふ言葉は低級通俗と云ふ同義語でない筈だから——



「大阪向き」に就いて

長谷川伸

新國劇の歴史を私は假りに、第一次新國劇と第二次新國劇と、二ツにわけてゐる。前者はいふまでもなく、故澤田正二郎君健在の時代を指し、後者は澤田君の物故以後、艱難を経て再起し、今日の地位を確立させるに至つた、現在のものを指すのである。さうして興味は、いふまでもなく後者にある、前者の業績は偉であつたが、それは既に歴史又は傳記に屬する、後者はそれと事違ひ、目下、歴史をつくりつゝあるものであり、目下、傳記をつくりつゝあるものであるからである。

○

新國劇廿周年興行が東京で催されたとき、東京會館で催された會合は、第二次新國劇、時には更生新國劇といつた時代もある、この新興勢力たる劇團が、今まで催した、又は催されたる會に較べて、最も盛んであつたことは、劇團の地位が著しく突進し、世間の信賴が大に加はつたからに他ならない。その席にはあらゆる階級の人があつた、あらゆる方面の人があつた、從來、この種の會合は、一ツの定型があつて、色分け的になつてゐた、新國劇と雖、その傾向が持たずにあつたのではないが、この會に於ては奇しくもそれが極めて自然に變化し、あらゆる階級とあらゆる方面と

を網羅することに進展した。もとよりこの會は編成一ツの規矩があつたので、あらゆるといつても、それは比較しての話であることいふまでもない。私などにはこの會が、前述の如く驚くべく多階級、多方面の貌をみせたのによつて、寧ろひそかに驚いたくらいであるが、人の心境といふものは不思議なもので、この時の盛んさ、生氣の充たさをも、下らぬに集りて感ずる人があつたことは、却つて面白かつた。そういふ觀察をしたものは私の知る限りではたつた一人、宇野浩二君だけで、さういふ文章は『文藝懇話會』にのつてゐた。

廿年を祝つても、何の業績のみるべきものがないのでは祝ふといふ事には意味を持たず、意味が生れない。新國劇は廿年を祝ふまでも、祝つて後にも、みるべき業足を大にのばし又はのばしつゝある。といふことは、大阪歌舞伎座の興行に何が演るか知らないが、近ごろ手がけた演し物なら、その多くはみな新國劇の良き仕事だといつて誤るまい、それ程この頃の進展は鮮かである。

或る一座の若手俳優が、主人公を演じて好評を博したと、一座の暗やみで、早くも反感が起り、やがてそれが表面化しかけたといふ話がある。これを聞いた新國劇のもの

が曰く、へえ、そいつは判らないな、自分たちの一座の一人が好演技をみせて世間の好評を博し、人氣が出たら自分達が強力化したのではないですか、喜ばないで反目するんですか、へえ、どうしてですか？。

嫉視とか排斥とかいふものが、判らない處に新國劇のものゝ良さがある。この良さこそ、戦へば必ず勝つまで戦ふ新國劇精神である。

新國劇には又、まだ海のものとも山のものとも判らないが、將來に希望のもてる若い者が相當多量にゐる、その一々に私は注目を怠るまじとしてゐる、この若い者がわづかながら進歩に似たものを舞臺で見せたときは、いひ知れぬ愉快さがある、これは私一人でなく、新國劇支持の人達はみな共通に同じことであるだらう。

大阪の新國劇愛好者に對しての希望は、新國劇によつて先づ、從來、大阪向きといふ悪い意味につかはれてゐた言葉、斷然、廢語にさせてしまうことに、力を協せられたいことである。大阪人が大阪文化が、悪い意味での大阪向きなどといふ言葉を、興行者に口にさせることがあつてはならないではありませんか。新國劇は努めてさういふ意味での大阪向きを排してゐる。だが、願くは一段の協力によつて、藝術鑑賞の昂上がやつて頂きたい。

新	國	劇
二	十	周
に	寄	す

中 山 楠 雄

新國劇が二十周年を迎へた。

誰が今日の新國劇を、澤田正二郎の
 るなくなつた時、想像し得たものがあ
 らう。

それ程、新國劇は澤田一人の劇團で
 あつた。

澤田のゐない新國劇など、實際誰も
 問題にしてはゐなかつたのだ。

それ程、澤田一人の力が、強く新國
 劇を歴してゐた。

これは、なにも我々ばかりの考へで
 はなし、残された新國劇自身、今日の
 この盛んなる姿を想ひ及べなかつた事
 と思ふ。

だが新國劇は、實際この目出度ひ二
 十周年を、堂々迎へたのである。

誰よりも彼よりも、私は無理な注文
 とはいひ乍ら、これを亡き澤田に見せ
 てやり度いと思ふ。

よくやつた！

澤田は屹度、あの權高な調子を沈め
 て、かう新國劇の人々にいふたらう。

依藤丈夫氏といふ、類ひ稀なマネジ
 ヤーを持つた事も、新國劇の幸せでは
 あつたが、なにより私は強い團結の成
 果を、こゝに見るのである。

今の劇壇を見渡して、なにより缺け
 てゐるものは、この團結の力ではある
 まいか。

新國劇のこの強い團結の力こそ私は
 聲を限りに賞讃したいと思ふ。思へば
 永い苦闘の年月であつた。力盡き刀折
 れて、幾度びかたはれやうとした新國
 劇が、その都度今にみると、互ひに肩
 をたゞき合つた成果が、見事今日の勝
 利を得たのである。

新國劇の歌を、口々に力強く歌ひ合
 ふ、あの一景を見た時、私はしみる
 澤田のえらささと、同時に澤田の幸福を
 思つたのである。

澤田は死んだが、澤田の精神はかうして若き新國劇の人々に依つて見事繼承されてゐるのである。

新しい國劇を目ざして立ち上つた澤田の、幾多の苦しみも、遂にこゝに報はれたのである。

勿論、立派な仕事をする事なしに、今日の勝利を得るわけではないが、二十周年といふ、この目出度き記念に氣を許さず、新國劇はこのところ矢張り早やに立派な仕事を見せてゐる。

月々の上演脚本にも、周到な用意が施されて、寸分ゆるみなき精進を續けてゐる。

これこそ澤田の撓みなきあの努力精進を精神として受け續いだ新國劇である。

上演脚本のやゝ固定した形を持ちはじめた新國劇が、直ぐにそれを反省して、近頃の上演目録は非常に廣い發展

を見せてゐる。

技藝も最早や立派なものになつた今日の新國劇が、かうして次第に上演脚本の範圍を擴大してゆく方針は、まことに當を得た事といはねばならない。次の撓みなき前進は、かゝつてこゝにある。

大衆を指導してゆくといふ強い信念を持つて進んでゆく事が、新國劇の最

大目的であらねばならない。

新しい國劇の樹立こそ、まことに今日の亂れた日本劇壇への大きな仕事である。

私はそれを心から新國劇に期待すると同時に、またそれを立派に爲し遂げるであらう事を、強く信ずるものである。

新國劇三十周年記念の日には、恐らく御身等の上に美事な演劇の神の冠は光り輝く事であらう。

よくやつた！
そして、頑張
れ、新國劇であ
る！

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！

◇モダン階上浴室新設◇

南地ホテル

一宿 三圓
二圓 額
一半 半

南地戎橋電停前

電話南四一四・四四一

		で	葉	紅
頃	た	つ	逢	

福 六 田 額

新富座の旗上げに、無残の失敗をとつた澤田が、京都へ落ちてゆき、それから大阪へ出て、悪戦苦闘してゐた間の事は、外に書く人があらうと思ふ。

それから、一年ほど経つてひそかに單身東京に戻つた事は、あまり知られてゐない。尤も、それまでにも、忍んで戻つた事があるかも知れないが、ともかく、半公式的に戻つたのは、その時が初めてと云つてよからう。

亡くなつた、名物男の、坂本紅蓮洞氏の肝いりで、赤坂の支那料理店の『紅葉』に集つたのが、秋田雨雀氏と、楠山正雄氏と、若輩の私とだつた、これは、澤田君の指令か或は、坂本氏の考へか、判然しないのだが、ともかくそれ丈けだつた。中村吉藏氏は、須磨子側の人で、その當時まだ彼とは對立的立場にあつた。要するに、彼が東京に戻つて、とにかく一年間の勞苦を語

り、憤ふ人は、たゞ、それ丈けだつたのである。

しかし、宴そのものは非常にはずんで、楠山さんは、ウイスキーに足をとられて、呑ん兵の總本山の紅蓮さんが介抱すると云ふ様な珍事も出来た。歸りは自動車で送ると云ふので、雑司ヶ谷にゐた秋田さんと、早稲田にゐた私と、澤田と三人で乗つて、矢來下まで来た時、もう少し送らうと云ふのを秋田さんも無理に辭退して、そこで別れた。そんなに自動車の高い時代だつた。(その翌年冬木心中が上演した時初日がひどく遅くて、そこから自動車で學習院前の自宅まで戻つて、十二圓とチップ三圓都合十五圓拂つた事がある。今なら、七十錢ならOKだらう)

その時に、いろく脚本について頼まれたが、外の諸氏は水が合はなかつ

た様で、私が「復讐」と云ふ五幕物を
書いた。この上演料金一百圓だつたと
記憶してゐる。尤も、その直前まで
私の下宿が、風呂、電燈、食事つき
で十圓だつたのだから、さう安い原稿
料でもなかつた。

それが當つて、次に治郎長を書いた
これは、三保の松原に避暑中に材料を
得たので、手紙で云つてやると、すぐ
電報で百五十圓送つてたのむと云つて
來た。出來上ると百五十圓送つて來た
ので、これは三百圓だつた。今に比し
て決つてゐるくない。

それから二度目に東京で逢つたのは
東京驛の待合で、電報で呼ばれたので
出向くと、澤田の親友の白木正光君が
ゐた。何か新傾向の作品がほしいと云
ふので、私は、當時、帝劇で上演して
ゐた、菊池君の恩讐の彼方を見る可
すゝめて、夜一所に見物した。それが

機縁で「父歸る」をやりたいと云ふの
で、その交渉役は私が引受けた。それ
から、山本有三氏の「生命の冠」をや
りたいと云ふので、これも私が同氏を
訪れて、許可を得た。

それが、後年彼が、文藝物に手をつ
けた最初である。

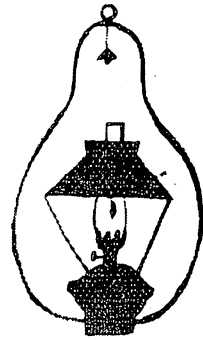
この事は、この間座談會で菊池さん
とも話した。菊池さんへは手紙で交渉
したので、長い、毛筆の手紙が來た。
保存しておけばよかつたと、今でも思
つてゐる。

とにかく、さうした事で、彼を菊池
氏や、山本氏やその他と結びつける、
一つの役目を果たしたのは私だつた、勿
論、私なくしても、誰かゞ、それをな
したのであらうけれど、この事、思ひ出
して、ひそかに自ら微笑しく思ふので
ある。

結核はオタウリ
花柳病科
藤原医院
★ 番 六三六 二六 戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★
結核はオタウリ

新國劇不撓二十年

— いばらの道の中の五つの思ひ出 —



俵 藤 丈 夫

新國劇の搖籃の地であり、第二の故郷である大大阪へ、創立二十周年記念興行の大のぼりを千日前にへん翻と

ひるがへし得られます今日、皆さまへの感謝とともに、私達の辿りました苦闘話、單なる過去の追憶以外に覇業への鞭ともなれば幸ひで御座います。

私達新國劇が過反二十年の間に辿つて來た道は決して樂なおだやかな道ではありませんでした。山あり谷あり、起伏轉々、全く苦闘の一路でした。

その間に何度か危険な關を越え、またれう／＼たる砂漠を渡つたことか……。今思ひ出してもゾツとする話しが澤山あります。

先づ新國劇廿年史の中で特筆すべき五つの大きな事件、これを知つて頂きたい。

第一のク受難ク

その第一は創立記念日即ち大正六年四月十八日です。この日は東京の新富座に初めて新國劇といふ名前の、のぼりを出して我々が旗擧げをした日で、出し物は岡本綺堂氏の、「新朝顔日記」額田六福氏の「暴風の跡」野上彌生氏の、「一事件」松居松葉氏の「寢台車」の新作四篇でした。當時文藝家協会を退きました松井須磨子の藝術座から分離してみづから組織した「新國劇澤田正二郎一座」の頭領として野心満々たる故座長の劇壇第一歩の記念日です。残念なことこの興行は御承知の通りの大失敗で一座はそのまゝ旅へ出る事になつたのです。それから五年間私達は文字通りの死闘を續けました。

この間懐しの大阪は新國劇の搖籃の地として育ぐみを受けた忘れ得られぬ都であります。

第二のク成功ク

大正十一年の六月、その月に我々は再び東都に進出、明治座の大舞臺で「カレーの市民」「父歸る」「國定忠次」を上演、この時の私達の氣持は今考へますと物凄位で座長始め、一同若しこれに失敗したら再び東都の土は踏まない覺悟でした。が幸ひに壓倒的な人氣を得ることが出来まして、こゝに新國劇の確りした基礎が出来た月でその意味で忘れられない時なのです。

第三のク受難ク

第三は大正十二年八月下旬の一座に起つた不可解な事件です。事件の内容は淺草公園劇場に出演中の一座が賭博の嫌疑で象潟署(淺草)に拘引されたのでした。が、この不名譽な事件も遂に釋明の日が來、續いて例の大震災にあひ、罹災市民慰安のため日比谷音樂堂で大野外劇を行ひ、帝都復興に際する歓樂の第一聲を市民へ捧げたのでした。

第四のク受難ク

第四の事件……それは最も悲しい澤田座長の死でありま

す。昭和四年三月四日午後一時二分、嗚呼それは三十八歳を一期として劇界の革命兒澤田正二郎が不歸の客となつた時なのです。私達はこの時全くどうしてよいかわからなくなつたのでした。何度か解散を傳へられまた事實をそれに近い苦汁をなめながら残された一座はそれからまた苦しい何月かをたゝかつたのでした。

第五のク成功ク

そして最後の第五番目の記憶すべきうれしい時が私達にめぐつて來たのでした。それこそ昭和四年九月早稲田大隈講堂における私達の故座長追悼公演の大成功です。出し物は眞山氏の「明君行狀記」ロスタンの「シラノ・ベルジュラック」中村氏の「土隸船」でした。茲で私達はハッキリと將來に對する見透しを得てまた故座長の次に來るべき辰巳島田の存在をもどうやら認められることが出來たのでした。それから後の新國劇は比較的順調にすゝみ御承知の通り昨年七月は演舞場に澤田七周年追善公演を、今また當地歌舞伎座ではこのやうに盛大な創立二十周年記念公演を催すことが出來たのであります。最後に私達の荆の道を脱して西條八十氏作詞、山田耕筈氏作曲の「不撓二十年の歌」を御覽下さい。

ク不撓二十年々 新進國劇

(一)

歩みはじめて、二十年すぎて

峠なかばで越し方みれば

頼もしいぞえ、祖國の空に

残るわれらの足の跡。

(二)

右に藝術、左に大衆

かざすマークは柳に蛙

若いわれらは日も夜も歩む

澤田譲りの半歩主義。

(三)

雨が来ようが、嵐が来ようが

人は度胸だ、仕事は熱だ

友よ、振れく、新國劇の

旗は血の色、熱のいろ。

(四)

何の浮世の胸突八丁

越えりや夜明けだ、光だ、朝だ

ウンとひと息、あのとつべんに

樹でろ、われらの旗じるし。



洋酒・食料品・罐詰問屋

株式会社 横山商店

大阪市東區豊後町三番地

創業明治五年

電話東94代表三八六五番
振番口座大阪二八四七番

芝居見たまゝ

人生劇場

三幕五場

歌舞伎座新國劇

第一幕 (三州吉良港、福泉寺寺内)

十年一番といふが、數へて見れば十五年ぶり、吉良の仁吉の血を引いた常吉、生残りの俠客吉良常が、やりたいだけの事をやつて見ようと、神戸を後に上海くんたりまで出掛けて行つたのは……。

だが、その三州の吉良常も海を越え

れば仕方のないもので、苦勞はみんな外れ玉、一つとして狙ひの利いたものとして、尾羽打ち枯らして、今再び故郷の三州横須賀村に歸つて見れば、十五年と言ふ年月は、見るもの、聞くもの、總てを全然跡かたもなく變へて了つてゐた。

辰巳屋の大旦那瓢太郎の、標木だけの墓の前に額づいて、吉良常は嘆く。

「西郷さんでも城山で討死すりや賊軍だ。泥鰌を割いてがつがつ暮しやがつた甚の野郎でも、俵の三平が縣會議員になりや、何々院何たら居士と來やがる」

そして瓢太郎の墓と並んで、これはまた見事に立つて居る甚の石碑を見上げるのだつた。

尙ほその近くには先祖吉良の仁吉の墓も見られる。

間もなく瓢太郎の一子で、今は東京にあつて小説を書いてゐると言ふ瓢吉が來合せて、共に久し振りの對面を喜ぶ。

「若旦那、あなたはこゝへ來る途中、もとのお宅の辰巳屋の前をお通りになりましたか」

「あゝ、すっかり變つちまつたね」
「名前まで變へやがつたのはいゝとし

て、變へるに事を缺いて吉良屋として
 るやがる。三州吉良港の吉良は、三平
 風情に名乗れる筈のもんぢやねえんだ
 昔の吉良常だつたら黙つて素通り出来
 たことぢやありやせんぜ』

『ぢやあれも三平か』

『あれも三平、これも三平でさ』

ところへ、呑込みの半助と、三平の
 仔分格の合點の龍が争ひ乍ら出て来る
 そして二人の後からは半助の女お袖
 が心配氣に……。

半助は以前吉良常の存分で、矢張り
 この横須賀村の出だ。それが、お袖に
 望まれる儘に、自分の村に立寄つて一
 興行打つた迄はよかつたが、田舎芝居
 にあり勝ちな大穴を開けて、それを埋
 めるのに苦しんでゐる中にお袖の美
 貌に惚れ込んだ三平が、一晚二晩でい
 くら女に酔をさせれば、その苦境を
 救つてやらうと、合點の龍を介して言

御観劇には特に



新發賣 鷄せんべい
 御推奨申します
 瓢亭食品

〇二・一 共料送 入繻美優

つて来た。が、半助とて、自分の女を
 おいそれと容易くは他人に渡せるもの
 でなく、二人が争つてゐると、吉良常
 はそこへのこゝ出て行つて、折から
 丁度其の場に來合せた三平と龍の眼の

前に、

『これを持つて行きねえ』

と百圓札を突きつける。

吃驚した三平と龍はそれを受取つて

そこへ歸つて行つて了ふ。

それから、吉良常は、

『親分濟まねえ』

と泣きつく半助を歸して、

『飛んだものをお見せしちやいやした
 ね、大旦那も苦い顔をなすつて居なさ
 るでせう』

と瓢吉と顔を見合はせて苦笑するのだ
 った。

第一幕(二) 東京 砂村運河 のほとり

ある橋のたもと。
 夏の夜。

二、三の通行人があつた後、土地の
 小金親分が、飛車角、白鐵、寺兼等の
 仔分を引連れてやつて来る。

實は、やくざの法も知らない此の邊
 の馬房部屋の人足共が、少しのさばり
 過ぎたので、ちよいと燻きを入れてや
 らうと言ふのだ。

白鐵が選ばれて、相手方丈徳の家へ
 呼び出しに行く。

その白鐵が歸つて来て間もなく、丈徳一家が勢ひよく乗り込んで来るが、飛車角に斬りまくられてはうゝの態で逃れ去る。

小金一家が引上げて行つた後も、飛車角だけは親分が先刻の騒ぎの間に落したと言ふピストルを探して残る。

折から吉良常と黒馬先生が通りかゝる。二人は砂町にある呑込みの半助の家を訪ねての歸りだ。

常吉は飛車角の顔を見て、過ぐる日吉良港で瓢太郎の墓に參つて居た時、仁吉の墓を尋ねて通り過ぎた女連れの男がそれであつた事に氣がつく。

と、奈良平が橋の上に現はれた。

この奈良平に、飛車角は、今日の出入りに若しもの事があつてはと、女房のおとよを預けて置いたのであるが、先刻白鐵の話によると、奈良平はどうも丈徳と氣脈を通じてゐるらしい。そ

れで、飛車角は飛んで行つて奈良平を捉へて、おとよは何うしたと聞く。

案の定、奈良平の返事は曖昧だ。

「おい、おとよは俺の女だぜ。俺が命がけて惚れ込んでゐる女だぜ」

「だからよ」

と、奈良平は空とぼける。

「だから何處へやつた。丈徳へ渡しやつたのか？」

「だつて、お前え……」

飛車角は、突嗟に手にしたピストルの引金を曳く。

と、奈良平はバツタリ仆れる。

悄然と、又もとの所に戻つて來た飛車角に、吉良常は言ふ。

「おやんなすつたね？」

「男の生きて行くハズミつて言ふもんでさア」

「うむ、いゝお言葉だ。おやんなせえ」
「やがて飛車角は、おとよの事を吉良

常に頼んで、自首して出た。

第二幕一 淺草裏そば屋內

惚れてゝ惚れ抜いた飛車角が、監獄へ行つちまつてからおとよは身を持ち崩して、今では河向うの玉の井の女になり下つて居る。

そのおとよと同じ家に、これも半助と分れたお袖が流れ込んで來て居た。

お袖は、十八の年、勿論半助と一緒になる以前の話だが、ふとした機會から青成瓢吉にぞつこん惚れ込み、今もつてその頃の事を忘れられないのである。この二人が冬の日の晝さがり、淺草の、或るそばやで酒を呷つてゐる。宮川を待つて居るのだ。この宮川と云ふのは、以前矢張り小金親分の下に厄介になつて居た男であるが、ふとした機會に玉の井に行つて、おとよの客となり、それ以來すつと馴染を重ねて來て

ゐるのだ。

おとよは言ふ。

「女つて言ふものはね、一人の男に属魂惚れ過ぎればこそ、外の男にも惚れるんだよ」とね。

事實、飛車角と宮川とは、何處か、感じが似て居るやうでもある。

扱じ、この女達の傍にもう一人客が居る。それは外ならぬ黒馬先生だ。

黒馬先生は瓢吉が中學校の時の先生だつたが、恰で酒の中から生れて来たやうな人間だ。年百年中酒びたり、今日も一杯やり乍ら、吉良常と瓢吉の来るのを待つて居る。間もなく吉良常がやつて来る。そして、飲み乍らおとよ等に世間話をしかける中に、彼女が飛車角の女である事を知り、一度前橋の刑務所に會ひに行つてやつたらどうかと勧める。が、おとよは、今は宮川にも惚れて居り、自分で自分の氣持が分

らなくなつて、黙つてその儘外へ出て行つて了ふ。

お袖、その後を追ふ。

『どうも、あつしには色戀は苦手だ』と吉良常は笑ふ。

宮川が入つて来る。

『兄さん、失禮だが、ちよいとお前さんに話してえ事がある。二階へお出でなせえ』

きよろくと女を探して、うろついて居る宮川に、吉良常はさう云つて呼びかけた。

第二幕(一) 上州前橋刑務所 裏門前

吉良常は、若し宮川の言分が、飛車角の女と知り乍ら、おとよを取つたんだとあれば、その場で果し合ひをしようと思つた。

が、宮川の口から、そんな事情は何んにも知らなかつた事、知つた時には

もう二人は拔差しにならない處まで落込んで了つて居た事を聞かされると、宮川と共に上州の前橋へ飛車角を訪ね事情を話して一緒に詫びてやるのだつた。

吉良常は宮川の氣性が分ると共に、これならおとよさんが惚れるのも無理はないと思つたのである。

晩春の日の朝早く、刑務所の裏門前で親しく飛車角に會つた吉良常と宮川は、物にこだはらないあつさりした飛車角の挨拶を聞く事が出来た。

『玉の井へ落つこちてりや、どうせ賣物買物のさらし首ぢやありませんか。宮川が買はうと誰が買はうと……それを詫びやうなんていふ了簡の方が氣に入らねえや』

それから、吉良常は飛車角の居ない間の出来事もあらし語つて聞かせた例の淺草のそば屋以來、おとよは行

方不明なこと、小金親分の死、そして丈徳一家が又勢を盛り返して、寺兼白鐵と言つたこつちの若い者達を、ひどい目に遇はせた事等々。

飛車角は口惜しがつて、

『何故身體の張切つてゐる若造のくせして、この年月ごろくしてやがつたのか。俺達の渡世には、命よりも何よりも、もつと大切なものがある筈なんだ』と宮川を責める。

第三幕 三州宮崎海岸、觀月ホテルの二階

向ふ意地の強い吉良常も、やがて寄る年波に故郷が懐しくなつて三州横須賀港へ歸つて來、どつと病の床に伏したのである。

吉良常が以前上海から歸國直後、瓢太郎の墓參りに歸つた時から數へて七年。その間有爲轉變は世のならひと言ひ乍ら、當時縣會議員だつた三平は女

狂ひの果てゞ又元の木阿彌になり下り高利貸の上園の手先になつて取立に歩いてゐる。

かと思へば、散々憂き世の辛酸を嘗め盡したお袖が、此の土地に流れて來て、今ではその上園の女房に拾はれ、元の瓢吉の家庭已屋に納まつて居る。

吉良常の病篤しと聞いて、瓢吉を始め、黒馬先生、出獄した飛車角、その他の面々が集つて來て看護に力めて居る。

たゞ宮川だけは丈徳一家に一人で乗込んで行つて、見事に相手をやつつけ爲に殺人六年を喰つて、目下服役中だから見えない。

病氣と言つても、吉良常は相變らず頑固で、決して醫者に見せない。そして毎日欠かさずに風呂へ入り、床の上に起き上つては皆んなと談笑し乍ら酒を飲む、誰が何んと言つてもこれは訊

かない。

唯一度、黒馬先生が醫者を呼ぶ積りで、間違つて獸醫を連れて來た事があつた。

その時だけは、

『はつはつはつは、黒馬先生が獸醫を呼んで來なすつたのか。こいつは斷れねえ』

と、笑つて機嫌よく診察された。

若い頃は松の木村の斬込み、年を老つてからは獸醫の診察、なんと言つても、これは吉良常の一世一代の傑作だと、皆んなもその時はどつと笑つた。やがて、病改まつて、並み居る人々、それから矢張り此の土地へ流れて來て、花奴と名乗つて藝者をしてゐるおとよ等に見守られて、吉良常は六十歳を一期として、笑つて大往生を遂げたのであつた。

新涼芝居讀本

井上・水谷の

コンビ禮讚

菱田正男

中間演劇を標榜して劇界に華々しい活躍をつづけてゐる井上正夫と水谷八重子の藝術座のコンビが七月の大阪歌舞伎座に出演してゐる。東京新派のあとにまた新派では氣が變らぬけれども、こんどの「地熱」などやはりこの一座ならではのものだ。

「男の償ひ」など東京新派に任して、もう一ついゝものを見せてほしかつた。たゞし今日の大衆がやはり甘い物歓迎では興行政策上止むを得まい。

「地熱」は三好十郎の作、杉本良吉氏の演出の顔合せに、井上、水谷のコンビなのだから悪からう筈はない。

筋は金以外には興味を持たず、女の愛情さ

へ受け入れない守銭奴のやうな男が、妹夫婦の生活に接して、醜然夫婦愛に目醒め、貯めた金は、妹夫婦に與へ、自分に想ひを寄せてゐた小料理家の酌婦と夫婦になるといふもので、少し甘いところもあるが、いゝものだ。

それに井上の守銭奴留吉の今更ながら胸を打つ至藝と、これにアツつかつて車輪に演つてゐる水谷の酌婦香代の巧さはこの作をウツと光らせてゐる。全く脚本と俳優の渾然一致の大舞臺と謂へやう。同時に井上、水谷の取組がやはり絶對不可離のものだと痛感さされた。それに山口の利助と岡田のお雪の夫婦もいゝし山口もますます圓熟して來た。村田正雄の轟、嘉久子の女將お磯、みね子の酌婦山村の志水などそれ〴〵にわるくない。

この一篇に感激して男の償ひを見ると、あまりにも大甘なのにウンザリされた「良人の貞操」で當てた吉屋信子女史の作に、川村花菱氏の得意の脚色ぶり、見物もこれを歓迎してゐるようではつまらない。水谷の壽美、

山口の滋、伊井の喜之助、岡田の瑠璃子とこの一座では無理のない配役で、よろしくやつてをり、井上が黒須博士でつき合ひ村田(正)が風呂番で儲けてゐるが、藤間房子の夕霧樓の女將おあいの好演ぶりと、森赫子の少女の面白さを特に記しておく。

第二に中野實作「新世帯案内」があり、新夫婦の家庭をうるさく訪ねる両親を書いたものだが、も一つ面白味もないし、わざ／＼井上と水谷を、わづらはすまでもなからうと思ふ。

家庭劇小論

西尾福三郎

明るく楽しく朗らかに……その他もつと盛り澤山な文句が並べてあつたと思ふが、とにかく八方睨み抜け目無しのスローガンを掲げて旗擧げた家庭劇が、つひこの間十週年記

念興行を各地で打つて廻つて歸阪した。

大阪で生れ、大阪で育つた劇團は昔からずい分澤山あるだらう。一榮一落それ／＼の経路を辿つて今日に到つてゐる中で、東京へ進出して行つて成功したものに曾我廼家と新國劇があり、現在關西に踏止つて覇を稱へてゐるものに關西新派と家庭劇とがある。

關西新派がボツ／＼東京進出を企てゝゐるかに見えてゐるが、それに先立つて家庭劇は既に昨年東京へ進出して多大の成功を収めて歸つてきた。好評だつた去年の人氣の忘れられぬ内に、何故今年も早く東京へ行かないのか。これを山上氏に訊してみると、東京の方で劇場の都合がつきにくいからだとの事。が愈々國際劇場も出来て少女歌劇の根據がそちらへ移れば自然劇場の融通も圓滑になるから今後は東京行きの機會も多くなるらう。大阪を根城に、神戸、京都、名古屋の巡環コースをグル／＼廻つてゐる許りでは一向變化がなく、自然観る方、観られる方にもだん／＼興

新涼芝居讀本

味が乏しくなつてくるのは止むを得まい。元來中心人物である十吾のサラリとした所の多い藝風は東京向きの味である。

從來の二回興行を一回に改めた事は大きな飛躍である。これによつて全員に全き休養と靜思の時間を補給した事は勿論として、作者兼主演者としての十吾天外もこれによつて相當餘裕のある仕事ができる譯である。

この上は豊富な一座の女優陣と、そうして達者な、特色の多い男優連とを擁する上、從來培つてきた根強い人氣を利用して映畫界への進出を企圖すべきである。

五郎劇の狂言と家庭劇の狂言との相違點がだん／＼分らなくなつて來つゝあるやうに思ふのは私の錯覺だらうか。聞く所によれば五郎劇のネタも我が十吾君の手許から提供されてゐるものが相當あるさうであるが、辛味の尠ない、道釋味の勝つた内容の點で兩者の持味に共通點の多い事は否めないだらう。

以前は五つの狂言の内、三つ目に喜劇でな

い新派物を据えて、一座の中の新派系の人々によつて主演させ、演出責任者まで決めてこれを重要な題目にしてゐた。観る方も恰度眞ん中の三つ目に味の變つたものがあるのでこれが一つの樂みになつてゐたが、近頃になつてから、主として三つ目に花柳物乃至は局外作者の軽い喜劇を持つて來るやうになつてから、何だか少し味が變つたやうに思ふのは私だけの勝手な好みからだらうか。

喜劇許りの五目竝べは何としても氣が變らな過ぎる。これでは愈々もつて曾我廼家劇追隨と思はれても致し方がない譯である。要するに家庭劇の特色は、曾我廼家系と新派系と、それに女優連の混成された多彩なメンバ―と、それによる演出の多面性にあるのだから、これを極度に利用して、新派物に新劇に或は純正喜劇に時には鬻物に多々益々變化の妙を發揮して貰ひたいものである。

變化の妙と云へば、茲一年許りの間にレビウ女優が加つたり、新劇畑の森英次郎が入つ

たり、さては京都喜劇の淡海迄抱擁して愈々雑多な色彩を加へてきた。またこの外に映畫界から某々女優が加はるやうな話もきいたがそれは沙汰止みになつたやうだ。

これらの人々を家庭劇本來の色に染め上げるか、それとも各自の特色は特色としておいて、雑色のまゝでそれを大きく綜合統一したものを家庭劇の特色とするか。それが今後に残された問題である。

關西新派の人々へ

森みよし

道頓堀角座を本據にしてゐる關西新派から山口俊雄君がぬけ、山村聰君が退座した事はかなりの打撃には違ひない。併しそれは決して致命傷ではない。現に兩君退座後もこの劇團は關西唯一の新派として阪神京都の人氣を維持し健闘しつゝあるのである。

けれども、それだからといつて關西新派は果して現状のまゝでいゝものだらうか。聊か疑ひなきを得ない。卒直に云へば今日の關西新派は餘りに常道過ぎ、所謂新派のスタイルに掬はれ過ぎてゐると思はれるのである。

現代の觀客は何かしらイラ／＼した神經を持つてゐる。これは明らかに世相の反映であるが、非常に神經がとがつてゐるのである。だから芝居一つ見ても生濫いものでは満足しない。思ひ切つて肚の底から哄笑出来るものか、ガツンと頭をどやされたやうな感じを受けるものか、どつちにしても刺激の強い演劇でないで満足出来ないのである。

遺憾ながら關西新派には今のところそのどちらも缺けてゐるのである。これは勿論一座の俳優諸氏の罪ではないが、前云つたやうに上演の脚本なり、配役の選定なりすべてが新派の常道を歩みすぎて觀客の受ける感銘が微温的になりやすい。これは非常に自戒すべき事ではなからうか。

新涼芝居讀本

一時凋落の一途を辿りつゝあつた新派が更生したのは明らかに古い新派の再演であり再検討ではあつた。併しそれらが観客に喝采されたのは決して今日若くは今日以後の新派演劇として本質的に禮讃されたのではなくして古老の昔語り如若い者が興味を感ずる程度にまた老人は老人で昔の新派を偲ぶ懐古的な魅力に誘はれたまでであつて、謂はゞ新派更生の導火となつたゞけである。

今やその導火は消えんとしてゐる。演劇人は須らく今直ちに新しい炬火を燃やさねばならぬ。

私が關西新派に心から望むところのものはこの劇團にふさはしい貫録ある舞臺監督を置くこと。一座の俳優諸氏は文句なしにその統制に服すること。そこには必然的に適材適所の實効が期待される明朗演劇と中間演劇の樹立を庶幾すること。これには若い男女優諸氏のハリキツタ健闘が必要となつてくるが、同時に豫備後備の座員諸氏は指導的立場で若手

の舞臺に協力すること。斯くして關西にタツタ一つのかけがへのないこの劇團に力強い現代性及び將來性を與へたいと念願する。

默阿彌の「鵜飼療」

森 ほのほ

先頃ラヂオで、默阿彌の明治物の一つ「戀鵜飼療」が出ましたが、お聴きになりましたか。(たしか其日は戀ならぬ燈火管制の暗闇に包まれてゐましたよ……珍らしい出し物ですが、現代人の好尚とは大分隔りのあるもので、院本式の趣向を世話に搗きなほしたといふに過ぎません。謂はゞ珍らしいだけのもので、これは能の方などでも同様です。併し稀には掘り出し物が無いとも限りませんが……これなどは先づ生命の無い方でせう。

當時も餘り評判が好くなかつたのは、お客を欺すのを常とする藝者が、狼に喰はれて死

ぬといふことや、その死にさまの餘りに無慘であつたことが原因だと言はれてゐますが、それよりもつと根本的な、即ち脚本そのものが高く評價し難いものであつたからではないでせうか。すべて八幕十七場の中、好評だつたのは、二幕目の文三小松の向島身投げの場ださうですが、これも男と心中しようとして死に遅れてから、ガラリ氣持の變るのが十六夜清心を逆に行つたもので、而もあれほど詩趣に富んだものではありません。結局、無慘繪をそのまゝのやうですが、五代目の小松が狼に喰ひ殺される件が、やはり見物の氣を惹いたのでせう。私も淺草の宮戸座で源之助のを見ましたが、今も印象に残つてゐるのは此場だけです。それから石和川の鶴遺ひの場も、五代目が實地踏査をしたといふ寫生的な鶴飼の實況が評判になつたやうです。併し私に興味を呼ぶのはこれらではありません。原作の序幕の三場目、押上田甫離家の場は月の輪の熊藏、化地藏の三五郎、病犬の勘次

といふやうな悪漢が馴れ合ひで誘拐した文金島田の令嬢お夏を酒の對手にして、悪事の打合せをする——謂はゞ暗い影の男達の生活描寫で、綺堂作『尾上伊太八』の二幕目、伊太八の住居の場を連想させるものがあります。

その場の光景を少し抜き書きして見ませう
——二重に角行燈を置き、以前の熊藏三五郎住まひ、八寸の膳の上に洒着の道具を載せ、傍にお夏震へながら酌をなし、後に勘次蚊いぶしの火鉢にて火燗をしてゐる。此見得本魚入りの合方にて

三五 少し位ぬるくてもいゝ、早く爰へ出してくんねえ。

勘次 蚊いぶしと兼帯だから、燗番は大骨折だ。

熊藏 本所に蚊が無くなれば大晦日で、舊曆でせえ秋の末ぢやあ、まだ大びらで蚊のゐる時分、本所の名物は貧乏人には禁物だ。

勘次 さあ燗が出来ました。(ト徳利を出す)
熊藏 嬢さん、一つ注いでおくんねえ。

新涼芝居讀本

お夏 はい。(トもちくしてゐる)

熊藏 おい、注がねえのか。

お夏 はい、只今注ぎますする。(ト震へなが

ら酌をする)

三五 滅法いい刺身だ、勘次も爰へ来て呑

まねえか。

熊藏

此子の酌で新しい刺身と来りやあ本
物だ。

勘次

兄一本所にやあ過ぎたものだね。

熊藏

これ。(ト制す。勘次心付き)

勘次

なに、本所ぢやあねえ、本當に過ぎ

ものだ。(ト言ひ紛らす)

マアかういつた按配にシバキは展開して行くのですが、筋よりも寧ろ臺詞の無駄の無さ
隙の無さに頭が下ります。かういふやうに部
分的には、かなり好い處があります。何と言
つても黙阿彌です。併しこのシバキは大劇場
には再演されず、源之助が宮戸座で再度演じ
た位のものでせう。書卸し當時の俳優では、
小松を喰殺す狼の役を梅幸(榮之助)等と

一緒に演じた竹松の羽左衛門だけが残存者で
せう。ツボラを以て任じてゐる同僚にも、恐
らく感慨の深いものがあります。

新喜劇隨筆

阪上勝芳

私は、喜劇が好きな爲、家庭劇や曾我廼家
がくると、待ち兼ねて初日に見に行くのであ
る。歌舞伎や新派の初日といふものは、道具
に暇どつて幕間が長く、俳優はせりふを覚え
きつてゐなかつたり、仕科にも戸惑つた處が
見えて面白くないものだが、喜劇にはその憂
ひがなく、又その時のキツカケで變つた演出
を見せたり、一つの芝居を何度見ても退屈し
ないのである。今日も、角座で大江美智子ク
ンと會つたとき「君の白ぬりでない暗い新派
悲劇、或ひは中間劇も、前後の狂言の膳立
上必要であり、又君の好んで進んで行く道か

も知れんが、たまには、綺麗なお嬢さんか、藝妓か、レビユー女優などになつて明るい芝居をやつたらどうだらう。殊に、時候は夏だしね——と、いつてやつたら、笑つてゐた朗らかな美しい笑顔だつた。私は、それを舞臺で見たいのである。

X

中座の樂屋に志賀廻家淡海クンを訪ふて雑談した。彼は「昔の喜劇は、役者が客の心臓をつかんで引きすり廻し、うんと舞臺を練つて、一つの科白でつゝ放し、どつと笑はせたものだが、今日は、劇團そのものゝ力で當らねばならないから難しい。それに三十餘年間笑ひから引つぱりあげられた今日の客は、昔のギャグや古いくすぐりの手法にあいてしまつた。容易なことでは笑はないから難かしい」といふのだ。淡海劇は、松竹を儲けさせたものだ。その彼が、一座を解散せねばならない運命に立至つた原因を、彼は良く知つてゐる。處が、今日の寵兒であるエノケン、ロ

ツパの所謂新喜劇と稱するものは、昔のボテカヅラの二輪加芝居その儘ではないか。而し、之は永久性のあるものではない。二輪加が亡んで、曾我廻家が擡頭した様に、喜劇レビユーは、現に没落の道をたどりつゝある。

X

曾我廻家五郎クンの話の中にも「今日の地盤をきづいてしまつた自分は、いつ崩壊するかも知れない。自分はそれを恐れて、策をねつてゐる」と、時勢の流れに沿ふて行かうとする賢明な彼の、それは偽はらない心情だらう。だが、三十七年間、今日まで曾我廻家の大きい足跡に對しても、私は飽くまで支持してやりたい。彼が聳立した五郎劇なるものは、没落性のあるものではない。人心の均線にふれずにはおかない、爆笑の中にも何物かを訴へる曾我廻家劇は、少くとも今日の新派よりは、私にとつて魅力のあるものである。

X

新涼芝居讀本

ぼてかづらの二輪加は、鶴家團十郎、團五郎、こはん、たにし、といった連中で大阪で育つたものである。低俗な、下卑な藝風の中にも、何かしら風格の中に生きて行かうとする眞剣な姿が見られた——と、淡海クンは語つてゐる。

×

中野實クンの新喜劇と稱するものゝ脚本は現代にアツピールするものかも知れないが、井上、水谷のやつた「新世帯案内」などは駄作中の愚作だ。

帽子を忘れたり、電話がかゝつてくる様な演出は、ありや何だ。

×

おちついてくるところは、家庭劇だ。十吾クンや、天外クンが脚本に苦勞してゐる點はよく分る。八月には十吾クンが支那の事情をあらはす、時局ものを書いてゐる相だが、私はそんな苦勞が俳優の上にかゝるのはどうかと思ふ。むしろ脚本を演出上に於いて苦心し

思ひ出話

新國劇

島田正吾

一年ぶりに又歌舞伎座に出演する。去年の『小平次神樂』の苦しみが思ひ出される。長谷川先生が態々僕達の爲に執筆して下さつたものだつたけれど、僕にはどうしても捌めなかつた。

舞臺稽古の晩から幾夜もつづけて『小平次』の夢を見た。苦しさの餘り、僕は折から來阪中の先生を訪ねてこの悩みを訴へた。その結果、先生によつて、おぼろげ乍らも芝居をはかる物指しの使ひ方とも言ふべきものを感得することができた。この計算法によればどんな役でも割りきれるべきである。僕は夢から解放さ

てやるのが、ほんたらう。「下積の石」などは家庭劇の十八番ものかも知れないが、十吾と天外の工夫が底なしの湖にひよろく出て来てしましても、心中の臭い新派があつて、その後で腹巻をおさへて、助けようか、助けまいか、助けたら金を出さねばならない——といった様な、餘りに考へすぎた脚色並びに演出は折角のいゝねらい處をぶつこわしてをり、合理性のないものになつてゐるではないか。

それは俳優が脚本をかく場合、いかにして自分を生かさうか、といふところに立脚した矛盾によるものであることがハツキリと分る

×
落語と漫才の立體的演出を吉本の藝人達の達者なところを浪花座で見せて貰つたが、之は、いかに花月劇場の常打となつても、永續性のあるものでない事はハツキリと分り、随つて私が一寸考へてゐた、新喜劇の分野に加はる性質のものではない。

れて釋然とした。翌日からの僕の「小平次」がどんなであつたかは自分には分らない。然し先生によつて悟りにも似た境地を初めて體得した、嬉しさは未だに忘れない。が實の所、僕はその後も「小平次」の苦しみに遭ふことが屢々である。結局僕には未だ物指しが使ひこなせないらしい、残念である。

新國劇

辰巳柳太郎

思出を語れとの事だが、今の僕達は思ひ出どころか、一番大事な時だ。

關西の作家達よ、いゝ脚本をくれ。このチャンスに一寸御願してをく。

思ひ出話

暑 中 御 伺 申 上 候

昭和二十年盛夏

松竹株式會社大阪支店

◇ 迅速確實安價「モツト」トシテ ◇

劇 場 裝 飾
演 舞 場 裝 飾

營 業 品 目

催物裝飾	町内飾付	室内裝飾	店頭裝飾
花 簪	花 環	久壽玉	造 花
			徽 章

各意匠、裝飾、考案
調製致シマス

船場一〇七〇番へセヒ御電話ヲ……



上 村 商 店

大阪市東區南久寶寺町三丁目
電話話場(83)一〇七〇番 • 振替座大阪二〇七〇番

芝居見たまゝ

總穩寺の仇撃（三幕）

歌舞伎座

出羽庄内藩、酒井宮内大輔忠勝の家
中で三百石を食む土屋久右衛門には、
萬次郎、虎松、としゑと云ふ三人の子
供が有りました。そして總領萬次郎に
は、同藩會根原三郎兵衛の娘を、往々
は妻にと定められてあつたのです。處
が若氣のあやまちとでも云ふのか、萬
次郎はフトした事から召便ひの女中ゆ
きと云ふのと、深く云ひ交す仲になつ
て了つたのです。

ゆきは、庄内領無音村の百姓、庄吉
と云ふ者の妹なのです。

當時の、階級制度と云ふものが、必
要以上にやかましく云はれた時代では
如何に二人が想恩の仲であるとしても
天下晴れて夫婦の語らひをする事は、
なか／＼困難な事であつたのです。
勿論、そうした場合の脱け道として
相手の身分の低い女を、表向きは相當
の家の養女と云ふ事にして置いて、縁
を結ぶと云ふ方法も行はれてはゐまし
たが、萬次郎の場合だけは、それも出
來ないでした。それと云ふのが先に
も述べましたやうに、萬次郎には既に

許婚の娘があるからです。

土屋家としては、どんなに萬次郎か
ゆきを熱愛してゐても、武家の義理と
して、その戀を捨てさせねばならない
のでした。が、萬次郎のゆきを思ふひ
たむきな心は、せかれればせかれる程
つづて行くのでした。此の爲に萬次
郎は、亂心狂氣したと云ふ事にされて
とう／＼座敷牢に入れられる事になつ
て了つたのです。

これも武家生活の痛ましい犠牲に他
ならないのです。

が、萬次郎の斯うした悲惨な様を見
て、ちつとして居られなくなつたのが
弟の虎松です。虎松は少年らしい感
じも手傳つて、どうしてでも此の不幸
な兄を助け出すには置かないと、固
く心に決する所があつたのです。そし
て遂にある風雨の激しい曉方、座敷牢
を破つて兄を救ひ、兄弟は共々國許を

逃れて了つたのです。

それから半年近い月日が流れました初夏に近い或る日の事、虎松は偶々も江戸詰になつて出府する途中の叔父土屋渡留に出會つたのです。

渡留として見れば、兄を救ふと云ふ一心から、やがては相續出来る三百石の家をも振り捨てて、他國にさまよつてゐる虎松がいぢらしいのでした。渡留はぢゆん／＼と兄弟の不心得をさします。そして一トかどの武士になつて、歸參の叶ふやうに精を出せといましめるのでした。その一言一句には肉身の慈愛がこもつてゐます。

虎松にも叔父の温い心がひしく胸にこたへるのでした。

斯うして叔父が別れやうとする時でした。虎松は思ひ入つた様で、其後のゆきの身の上をたづねたのです。而して叔父の口からはどんな消息が得ら

れたでせうか――。

渡留の云ふ處に依れば、ゆきは鶴ヶ岡城下の、さる町人の許に嫁して、今日明日にも人の母にならうとしてゐると云ふ事でした。

あれ程兄が愛し、信じてゐたゆきが一。そう思うと速に虎松の胸も怒にふるへるのでした。

斯うした事のあつてから、又幾日かが経つてからです。出羽庄内無音村の農家庄吉の家に、突如、姿を見せたのは土屋萬次郎でした。

而も、其の面には殺氣が漲つてゐます。

萬次郎は弟虎松から、其後のゆきの消息を告げられて、怨み怒り、悲しみ落膽し、亂れる心を抱きながら、引きづられるやうに故郷の土を踏んだのです。

が、現在の彼は、ゆきやゆきの兄を怨み憎むより以上に、自分故に一生を日陰の身にさせて了つた弟虎松に對する、濟まないと云ふ氣持ちの方がグツと大きく、胸はかきむしられるやうな心地がするのです。そして其の氣持ちに更に拍車をかけたのは、自分達が國を出てから、妹としゑに既に婿が迎へられて、それが土屋家の相續人に決まつてゐると云ふ事でした。

その婿と云ふのは、黒谷太四郎の弟で丑藏と云ふ眞影流の達人なのです。が、萬次郎には虎松がいぢらしく映れば映る程、此の丑藏が憎まれるのです。

斯うした時も時、萬次郎がこつそり歸國した事を知つた土屋一族では、丑藏に命じて萬次郎を我家に連れ戻さそうとしたのですが、萬次郎は憎いと思ふ丑藏を眼の前にして、只譁もなく怒

りがこみ上げて来るのでした。そしてモウ斯うなつては、いくら丑藏が條理を盡して説く言葉も、更に耳に入る筈はないのです。そればかりか理不盡にも丑藏を斬つて捨てやうとまでするのでした。

一方丑藏の方ではあくまでも穩かに事を運ぼうとしたのでしたが、今はそれも總て徒勞に歸してしましました。理不盡な萬次郎の刃を防がうとして心ならずも抜き合せた一刀には、遂に萬次郎の血潮がそめられて了つたのです。これも運命と云ふ可きでせう。

話は變つて虎松の方ですが、兄萬次郎が自分には何事も告げずに故郷に立つたと知つて、急いで其後を追つたのですが、彼が故郷の空を仰いだ時、既に萬次郎は丑藏の刃にあえなくなつてゐたのです。

虎松が丑藏を兄の仇とつけねらうやうになつたのも、事の成り行きから又仕方のない事です。虎松は江戸に出て一心不乱に腕を磨くことになりました。そして時期の到るのを待つてゐましたが、聽て其時は來たのです。

それは冬の訪れの早い北の國では、朝夕の風に、そぞろ肌寒むを覺へる九月二十二日のことです。

鶴岡城下にある土屋家の菩提寺、總穩寺の墓地で、丑藏の墓參を待ち受けつつあつた虎松は、兄の仇丑藏に勝負を迫つたのです。

丑藏としては心にもなく萬次郎を手にかけたのです。

が、今となつてはその辯解も及びません。

二人は互ひに斬り結び相討ちとなつて果てるのでした。

一人は兄の爲に、一人は虎松の武士道を貫かせる爲から進まぬ刃を取り、壯烈！ 共に總穩寺の朝露と化したのです。

× × ×
× × ×

劇場建築専門並二
一般建築設計施工

池上建築工務所

事務所

東區京橋二丁目四八京阪ビル
電話 東七二三一番

自宅

市外布施町菱屋西二七番
電話 小坂五六八番

『愛怨峽』の演出について

星 四 郎

『愛怨峽』演出について、何か書く豫定でしたが、實はあまり多く語るところがなかつた。

演出者として、無責任のようではあるが、これは脚色者である郷田氏が何時も傍にゐて、なにかと相談して稽古を進行させたからで、謂はば、『愛怨峽』の演出プランは郷田氏と合作のようなものである。

『愛怨峽』の臺本を手にしたのは、それは七月の前半を京都公演でくらし、歸阪して愉快のうちには百六十三枚、四幕十場といふ膨大なものを握つた。

まづ、二回程くり返して読んでゐるうちに私は、この四幕十場の『愛怨峽』を軽いリズムで芝居を運んで行かうといふ演出プランがたつたのでした。

配役も別稿の如くまづ少しの無理がない。これは脚色者郷田氏が劇團の俳優をよく知つて、この『愛怨峽』を脚色された事が判る。演出者として、配役の好條件は、その芝居のなかば成功の自信を得るものである。

私は、この好條件で演出をする場合、その俳優の個性を認め、あはせてその俳優が持つ技術を自由に舞臺で活躍して貰ふのです。然しこれは多分の危険性がある、それは古いフオルムの再現で、所謂の型この型で終つてしまふ方が多いからである。だが、それに據つて自分の持つ演出意圖を乗り越へてくれる場合もある。要は演劇的に形象化するにその俳優の持つ個性と演技を利用して的確に形象化しようとするのである。

郷田氏の脚色せる『愛怨峽』は前述の如く、よく劇團の俳優を心構へて書かれた爲め演出者である私は四幕十場といふ、なが丁場を序幕から大詰まで、ぐんぐんと追ひこんで行く事が出来たのである。

舞臺は、田舎と都會の交叉である。序幕と第四幕で、但馬の方言を使つてゐる、私はその但馬の言葉をよく知らないが、聞くところによると、そのアクセントは非常に情緒的ださうである。

もしこの方言がそれを演る俳優によつて徹底されたならば、地方色が出て、あはせ舞臺が都會に移つた時に、その効果は芝居の厚味ともなり深味でもあると思ふ。

劇中に、萬才がある。これは、おふみ（梅野井、演）芳太郎（笈川、演）が小さな巡業團に加はつて萬才師となるのである。「愛怨峽」といへば、萬才は……といふ程で、いはば「愛怨峽」の萬才は、ミツだと思ひます。

これを演る梅野井氏、笈川氏の二人は初日が開くまで、さぞかし頭痛の程であらうと思ふ、なぜなら、拙くても不可ないし、本物より上手でも不可ないといふ氣持があるだらうと思ふ。これは、たゞ素朴な態度で立ち向ふより途はないのである。

映畫の「愛怨峽」は、カット、カットの連続である種の興味を有したのに比して、芝居は限られた舞臺である、その上四幕十場の大道具である。この道具の轉換から興味の分散を私は心配してゐる、だから私はこの「愛怨峽」を輕いリズムで運んで行きたいといふ希望をもつてゐる。

最後に、舞臺の萬才が芝居と並行して、表現化され、しかもそれが實際の萬才に到達する事を私は楽しんでゐる。

舞臺けいこの日、記。

宣傳廣告一般

三土廣業社

道頓堀松竹座地下室
電話南七九四七

映畫街



新興キネマ京都撮影所作品

祐天吉松

脚本 八尋 不二
監督 森 一生
撮影 三木 稔

——配役——

祐天吉松 市川右太衛門
お縫 松平 龍子
加賀屋七兵衛 葛木 香一

立花金五郎 松本 田三郎
お旦那半次 原 聖四郎
馬子久作 小泉 嘉助
經師屋茂助 川崎 猛夫
乳母おむら 三保 敦美
七 松 日高 梅子
番頭與兵衛 森 田 肇
手代長吉 春路 謙作
辱し野女中 大江 八重子
全 作次 星野 辰男
久作の子久太 ツ ネ 公

——解説——

新進森一生監督の久々のメガホンになる昇進第二回作、脚本は八尋不二で、祐天吉松の仁俠を描く市井人情物に鮮烈な感覺で以て野心的な意圖を盛る異色的な大衆篇でカメラは名カメラマン三木稔

——梗概——

立花金五郎、お旦那半次と共に兩國三人男で言はれる祐天吉松、男つ振りが好くつて度胸はあり巾着切には惜しい様ないゝ男。その

吉松が江戸で繁葉な兩國廣小路、見世物小屋が軒を並べる雑踏の中で美しいお嬢さんの簪を抜いた事がそも／＼の發端——物見高い彌次馬に取巻かれ飛んだドヂのさんざつばら、つい口から出ませに嘘の八百、それを素直に受取つたお嬢さん、堅氣の商賣をする様にと優しい意見に添えて憐みの金を幾何らか吉松に呉れ去つた。早速吉松が開いて見ると意外にもそれは山吹色の大金だつた。いくら恵まれた金とは言え、親の病氣と偽つた自分の氣持を知らず與えてくれた無垢なお嬢さんの純情さと死んだ親に相濟まない自責の念が湧上つて吉松は懺然悔悟、其處で半次と金五郎に對し、行末兄弟分の縁を切り堅氣になつてからは往來で逢つても口をきいてくれるなど頼んだ。

處が縁と云ふもの不思議なもので、吉松にかつての廣小路で金を恵んだお嬢さんは、加賀百萬石出入りの豪商加賀屋七兵衛の一人

娘お縫で、彼女はいつしか兩國で見染めた吉松を忘れ悶々の目を送つてる中に、今は經師職人の吉松が大切な掛物の修繕から加賀屋へ出入する事によつて、お縫の吉松への愛情は急激に燃え、とう／＼吉松は一躍百萬長者の養子になり、今ではお縫とのあひだに子さえ出来て商賣は繁昌し、何不自由のない暮しだつた。然しその幸福も長くは續かなかつた。惡辣な立花金五郎は以前の事を種にして二度三度と吉松を呼び出しては金の無心をするのだつた。さすが吉松もたまり兼ねて、或夜金五郎を連れ出して斬らうとしが北辰一刀流の彼に却つて水中に突落され、其の上金五郎は吉松が加賀屋へ歸つたら一家皆殺しにすると思つた。自分一人は何でもないが其の爲に加賀屋一家に迷惑が掛つてはならぬと吉松はとう／＼決心して其の儘當のない旅に出、それをいゝ事にして無頼の金五郎は加賀屋へ惡態吐きに行き、七兵衛を斬り

この騒動の中に火事になり一家は離散した。

それから六年——江戸に歸つた吉松は其處で家は焼け一家離散の姿を見なければならなかつた。仕方なく經師屋茂助の家に足を止めて毎日吉松は探し廻つて、やつとの事で今は淋しい佗住居に妻子に逢ふ事が出来た。そしてお縫から七兵衛が金五郎に殺された事を聞き、激怒した吉松はお旦那半次の手引で金五郎を探し出し、旅で磨いた手練の腕で見事金五郎を斬り目出度く仇を討ち、今度こそは親子三人揃つて平和な日が續いた。

新興大泉作品

「結婚への道」

原作 菊池 寛
脚色 畑本 秋一
監督 田中 重雄
撮影 二宮 義曉

— 配 役 —

特別出演

藤村 禮子 山田 五十鈴
鮫島謙太郎 菅井 一郎
藤村 道代 御影 公子
鮫島 傳助 大友 壯之介
前川 先生 大井 正夫
島津 良策 立 松 晃
明石 蘭子 古川 登美
鮫島 秀子 久慈 行子
石川 俊一 大泉 浩治
河野代議士 中村 順一郎

— 梗 概 —

藤村禮子は、父の商取引上の政策のロボットとなつて、相愛の島津を夫つて、關西の大實業家鮫島の御曹子謙太郎の妻となつた。

尤もこれは外に又ひとつ重大な理由があつた。それは島津には蘭子といふ女が居るためであつた。がこれは蘭子の夫へんな誤解だつたのだ。蘭子は奸計を用ひて島津を自分のものにしやうと企んだのだつた。不遇な境界に居て、ひた

すら作家道に精進してゐた自分を常に激勵して呉れてゐた禮子の暖い愛情を失つた島津は全く別人の様に自暴自棄となり荒んだ生活に墮ちて行つた。禮子の結婚生活も幸福ではなかつた。一切を命に見積る夫謙太郎のピント外れの愛し方、下品さ。さういふ空虚な生活に苦惱し續けてゐる鮫島家に突如として財界のバニツクが襲つて來た。

無一文になつた謙太郎と禮子、この混亂の最中に蘭子が禮子を訪れて、島津の服毒を告げる。禮子はこの人生的な暴風雨を契機として始めて彼女は、彼の爲に、蘭子の爲に又自分の爲に「人間は與へられた運命に素直に生抜いて行くべきだ」と説く。

初めて本當の愛情に目ざめた謙太郎と禮子、蘭子に迎へられた島津は夫々幸福な二組の夫婦生活に入つて行つた。

一 番 商 白 芝 居 の 雜 誌

『道 頓 堀』を 年 極 め 御 講 讀 し て

三 圓 十 三 錢

下 さ い

映 畫 街

道頓堀豆新聞

梅野井・笈川が

大阪辨のまんざい

角座の關西新派劇は「蘆溝橋事變」と共に川口松太郎作、郷田惠脚色「愛怨峽」を上場その第七場、謙吉に捨てられたおふみが、救ひの主芳太郎とのコムビで万歳になり、巡業隊に加はり、思ひ出の石で蓋を開けた夜、客席に謙吉の姿を見出したおふみの文蝶は思はず撥を落して芳太郎の芳蝶に氣づかれる、それと覺つた芳太郎は調子をはづませて謙吉の肺腑を抉る薄情男の罪を万歳調で唄り続ける——出石壽座の舞臺の場は梅野井（おふみ）笈川（芳太郎）が苦心の結晶であるが、万歳の本場、大阪辯を用ひて大いに効果を擧げてゐる。

ラチオ体操と家庭劇

中座の松竹家庭劇の第一「體位向上會」は目下旺んに賞揚されてゐるラチオ體操を探り入れた喜劇で、舞臺に若手連がズラリツと並んで體操をする場面など観客にウツカリオーツツとやり度くなる衝動を與へてゐる。

一日二百圓の花火代費用を吝まぬ時局劇

道頓堀の大呼もの角座の關西新派劇の時局篇「蘆溝橋事變」五幕は序幕の日支軍衝突から豊台間の高粱畑の白兵戦、さては北京西城大詰の郎坊大激戦等、軍人に扮する夥しい俳優を必要とする場面多く爲にあの大一座が總登場しても効果の上に不足だと云ふので特に五十数名のエキストラを動員、又砲銃の花火が從來の行き方では不可ないとは亦最も新しい音響花火一回約百圓、一日に二百圓を使用し物凄くも、壯烈な戦場を髮據せし

めてゐるが、五十人のエキストラ、二百圓の花火代は角座としても新記録であるだけに如何に松竹がこの時局劇に費用を吝まず萬全を計つてゐるかが窺はれるわけである。

祖國愛を絶叫する

十吾の献金床屋

時局愈々緊迫、近所の誰彼に動員下り、店の若者も出動する事となつたのに軍籍に在る長男が行方不明の爲、一朝召集令が下つた場合の體面を考へた父親が切腹して國家への謝罪と世間への申譯にせんとするを店の連中が止める、これは中座の松竹家庭劇が大いに當てゐる時局劇「千人針」の主人公十吾の扮する愛國床屋日の丸軒の主人の環境を説明したものが國家に對する國民の義務を説き、祖國愛を絶叫するこの献金床屋の人氣は素晴らしいもので満場の喝采を博してゐる。

二つの芝居に感動したと

酒井大佐の觀劇談

海軍大阪地方人事部長酒井大佐はその公務の上からも逸早く上場された時局劇を見分ればと、晝は角座、夜は中座と觀劇強行軍をなし、感激の瞳を輝やかせつゝ左の如く語つた。

蘆溝橋事變（角座關西新派劇）は今回の事變を巧みに劇化し、俳優諸君が熱誠を籠めての力演であり郎坊に於ける西脇軍曹の戦死の状況等實に感動の深いもので思はず泣かされた。又千人針（中座の松竹家庭劇）は應召者の覺悟、銃後の護りを床屋の親爺と理髮師と藝妓で綴つた芝居だが運びに無理がなく床屋の献金筒や、親爺の行方の判らない息子を思つて焦慮するアタリ、非常時に處する國民心理を穿ち得て實に嬉しかった。

道頓堀の劇場で斯うした劇を上場された事も亦實に當を得た企劃で自分としても大いに喜んでゐる。

る次第である。

天外の發奮振り

軍國劇「千人針」余間

中座の松竹家庭劇はオール新作
揃ひとして頗る好況を呈したが、
この呼びものの軍國風景を寫す

「千人針」で不計すも、天外が十
吾をはじめ、一座の俳優連を感激
せしめた事件が持上つた。と云ふ
のは、この劇の天外は散髪屋の模
範徒弟で召集に應じ出動するに當
り許婚者から解消を申込まれ、十
吾扮す日の丸床の親爺が大いに恐
り兼々この模範徒弟に心を寄せる
藝妓(石河)と握手させると云ふ
二枚目の役處なのだが國家非常時
須らく軍人精神を捧持すべきを自
覺した天外は誰にも内密で去る二
十六日以来堅く禁酒を實行しつゝ、
あつたのだが、舞臺稽古當日、應
召者が長髪では不可ないと自慢の

道頓堀豆新聞

美髪を惜し氣もなく五分刈にした
もので、十吾もその心意氣に感じ
思はず舞臺で「この調子でやつて
呉れ」と堅く天外の肩を抱いたと
云ふ。

キング一黨の

紺屋高尾

混成劇團に吉本ショウのタイト
ルを附し去る一日初日を開けた浪
花座の異色メムバー、永田キング
一黨の「紺屋高尾」は彼の有名な
物語に敵討を絡ませた抱腹絶倒劇
で、場割は左の如くである

- 1 百軒長屋 2 吉原土手
- 3 太夫の部屋 4 吉原土手
- 5 百軒長屋 6 吉原堤
- 7 吉原仲ノ町

裴龜子の

アリアンの唄

浪花座の吉本ショウの内、裴龜
子樂劇團の呼びもの、半島の俗語
で最も人に知られた「アリアンの

唄」は裴龜子獨特の哀調と異色あ
る舞踊で好評である。

勸帳進が望みだつた

延之助の思ひ出

臉に残る「八つ目」の奴

河内屋の次男坊で頗る前途を嘱
望されてゐた實川延之助(天星隆
司)が楽しみにしてゐた天神祭も
待たて去る十九日午後八時十六年
のあどけない夢のまゝ冥府へ旅立
つた、暑さの折柄であり「子供
事ですから他へ御迷惑をかけては
濟まぬ」と云ふ河内屋一流の心遣
ひから、去る(廿三日)朝近親の
手によつて中寺町の圓妙寺で葬送
された。

昭和九年三月大阪歌舞伎座の先
代延若五十年追善興行の「壽生立
曾我」に兄延之助(曾我十郎)と
共に箱王を勤めたのが初舞臺、こ
の時の父延若の箱根別當と團三郎
の二役に鷹治郎が北條時政で附合
ひ兄弟の前途を祝福する劇中口上

でヤンヤの喝采を博した。

同十一年中座の正月興行の「假
手本忠臣蔵」八ツ目の道行で芳子
の戸無瀬、延二郎の小浪に奴を演
じた姿など未だ臉に残る當り役で
あつた、何んな役が演じたいかと
聞けば

「勸進帳」の辨慶「大森彦七」
等大きな立役を好み幕内でも延之
助ビイキが多かつた。長三郎らと
善舞した十一年十月の歌舞伎座、
「月大漁」が最後の舞臺、最も十
二月の浪花座、扇雀らの「藤十郎
の戀」などの番附面には出てゐた
のだが、不幸病床より起てなかつ
た――

★ ★ ★

★ ★ ★

編輯後記

村上勝

暑さにもめげず、各座が賑々しい陣容で蓋

をあけた、歌舞伎座は、榮冠輝く新國劇の二十週年記念興行、中座は松竹家庭劇が、時局劇「千人針」を呼物に續演、角座へ歸演した關西新派も時局劇「蘆溝橋事變」を上場、ニュース映畫にも見られない事實と緊張せる舞臺を見せてゐる。浪花座は吉本シヨウ、京都南座のエノケンが京都打上げ後、引續いて神戸松竹劇場へ出演する筈です。

X

暑中御伺ひ申上候

昭和十二年盛夏

松竹株式會社大阪支店

演劇部宣傳課 一同

この各座の陣容に隨つて編輯としたもの、前の編輯擔當、池尻勝彦クンが、京都事務所へ榮轉、取敢へず引繼いだ次第で、お眼だるい點が多々あると思ひますが、御諒承願ひます。ごうも僕と「道頓堀」とは、キツテも斬れぬ御縁があるのでせう。

X

暑中の折、御多用中にも關らず、本誌のため、長谷川先生をはじめ、諸先生方が御執筆下さいましたことを誌上ながら厚く御禮申し上げます。

京都支局の大橋君も來月より引續いて活躍されますから、御期待下さい。

X

昭和十二年八月十五日發行
月刊「道頓堀」第十二年
雜誌「道頓堀」第百卅一輯

○誌代は前金お拂を願ひます。
○郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
○御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島三丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

部一 金三拾錢(郵錢五厘) (税)

昭和十二年八月十五日印刷
昭和十二年八月十五日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部

共同編輯 山上貞三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部

京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始礎 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉 スキナ石鹸

専賣特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大坂 設置元
朝日堂株式會社

大坂 本舖
中田スキナ屋謹製



松竹京都超特作・本格的藝術映畫



流

坂東好太郎
主演

坂東橋之助
河原崎權十郎
森靜子
嵐徳三郎
志賀靖郎
中村正太郎
本郷秀雄
白河富士子
特別出演

轉

柳さく子・井上晴夫
風間宗六・高松錦之助
尾上榮二郎・南光明
山口勝久・中村吉松
助演

三味線を生命に苦闘する
若き藝術家の半生記ノ

「サンデー毎日」千葉賞第一席入選作・原作 井上靖
脚本 紫乃塚乙馬・柳川眞一・中村滋
監督 二川文太郎・撮影 森尾鐵郎



12年十月廿五日第三種郵便物認可
12年八月廿八日一回
12年八月廿八日一回

第十二年 第百三十一輯

一部金參拾錢